

末核型が有標ではない方言 —名字から見る岩手県雫石方言—

上野 善道

1. はじめに

本稿に言う「末核型」とは「語末核型」とも言い、語末拍にアクセント核のある型を指す。伝統的には「尾高型」と呼ばれてきたもので、核の位置を語末から数えて（逆算指定）－①型とも記す。以下、先行文献の言及に際しては、入力 of 都合等で、本稿の用語表記に適宜統一して記す。

アクセント体系の中で一般に最も型の種類の多い名詞においても、この末核型が、語種にもよるが、その出現頻度が限定されていて有標（marked）扱いされる方言がある。日本語多型アクセントの中において、京都などの関西方言にはそれが強く見られる。それよりは緩いものの東京方言にも制限があり、それを避ける方向への変化が起こっている。しかしながら、末核型が有標とは言えない方言もある。その例として、私自身の方言である岩手県雫石（しずくいし）方言の名字を中心に、東京方言と対比させながら取り上げる。

論の流れは、まず末核型が有標である代表例として関西方言を一通り見た後、それよりは末核型が多いものの、他の型への変化の過渡期にある東京方言につき、普通名詞ではいわゆるA型B型問題に焦点を当てる。最後に雫石方言につき、普通名詞はA型B型に関連する範囲に限定するが、そこでも末核型が多いこと、そして名字のアクセントにおいても、関西・東京方言では末核型が事実上存在しないと見られるのに対して、雫石方言にはそれが多数あることを示す。

2. 末核型が有標である関西方言の例

ここでの関西方言とは、京都や大阪に代表される、高起平進式（Γ）と低起上昇式（J）の二式と下げ核（J）からなる体系をさす。その高起式（略称）には末核型が存在しないに等しい。稀な例外として、服部四郎（1931: 19-22）が三重県亀山方言で報告し、その後いくつかの方言でも見つかっている3モーラ語の「アシ.タ」（明日）、即ち、[アシ.タ]ガがあるだけである（音声表記は〔 が上昇、〕が下降、シ.は無声化）。4モーラ語にも「アクルヒ」（明くる日）や「カミノケ」（髪の毛）があるが、見るからに2単位形に由来する語形である。和田實（1942: 11）が指摘した2モーラ語の「上、下」を「或る強調を以ていふ時」の[ウエ]ノ、[シタ]ノについては、中井幸比古（2002: 17）を参照。

一方、低起式には末核型が一定程度存在し、2モーラ語には「アキ」（秋）、「アメ」（雨）、「シロ」（白）、「ナベ」（鍋）などの通常語彙もあるものの、「アブ」（虻）、「クモ」（蜘蛛）、「サル」（猿）、「ヒル」（蛭）、「ヘビ」（蛇）；「アホ」（阿呆）、「チビ」（ちび）、「ハゲ」（禿）、「ボケ」（惚け）など、一般に好まれない傾向にある動物語彙や、人の否定的評価を表わして今日では差別語彙とされかねないものが多く含まれている。

3モーラ語では、「サッキ」（先ほど）、「セツ」（摂津＝地名）、「マツチ」（燐寸）、「ミンナ」（皆）、「ユンベ」（昨夜）などの単語もありはするが、その多くは「ギッチョ」（左利き）、「チカメ」（近眼）、「デッパ」（出歯）、「デバ」とも）、「ノッポ」（背高）、「ビッコ」（足）などで、語音構造も○ッ○のことが多い。

それより長い語形になると、低起末核型のある方言自体も、それがあつた場合の語例も、極めて限定され、「クロンボ」（黒ん坊）、「クイシンボ」（食いしん坊）などが知られている程度である。

ここから、関西方言の末核型は、頻度だけではなく、意味的にも有標であることが分かる。（所属語彙の少ないその他の型については、末核型の関連情報も含め、前掲中井 2002 も参照。）

3. 末核型が有核である東京方言

3.1 名詞の中の末核型の分布状況

東京方言では、末核型も名詞にはそれなりに存在するが、3 モーラ語以上での頻度は少なくなる。名詞全体の型の分布状況を示した論考はいくつかあるが、ここでは秋永一枝（2002: 53）に基づき(1)に示す。M はモーラ、丸付き数字は語頭から数えた核の位置で、①は無核型、枠の中の数字は％、太字数字が末核型の率である。ここで注意すべきは、1 モーラ語の①型は末核型ではない点である。それは、例えば、核表示でヤマ] (山), オトコ] (男) に助詞の「ノ」が付くとヤマノ=, オトコノ= (=は無核型の印) となるのに対して、テ] (手) はテ]ノ カタチ= (手の形) のようになって、テ]の核は残るからである。従って、テ]は末核型ではなく、頭核型（語頭核型、頭高型）と見ることになる（秋永論文も同様の扱いで、おそらく同じ論拠であろう）。

(1) 東京方言における名詞のアクセント型の分布（太字が末核型）

核\M	1	2	3	4	5	6	7
①	32.9	17.4	50.0	68.8	26.8	19.6	2.5
②	67.1	63.2	37.7	8.6	3.0	0.8	0.2
③		19.3	5.8	10.6	10.1	1.0	0.3
④			6.5	8.1	49.1	35.8	0.8
⑤				3.9	7.1	35.7	32.8
⑥					4.0	6.1	58.3
⑦						1.0	5.0
⑧							0.1

これを見ると、全体として末核型が劣勢であることが分かる。細かく見れば、2 モーラでは無核型（平板型、①）が、3 モーラ語では②型が、そして5・6 モーラ語では①型が末核型よりも少ないが、その差は僅かであり、これには、一方で2 モーラ語では「汽車、父」など①型から第1モーラの無声化によって②型の語末核になって増える例があること、他方で、3 モーラ語の②型は周辺方言と異なって東京方言では言わば“嫌われた型”であり、他の型、特に①型に変化している例が非常に多いこと、そして、5 モーラ語以上では、ほとんどの方言で⑤型より前の核は少数しかないと考えられる。収録語彙によっても数値は異なり、全体として末核型が劣勢であることに変わりはない。

東京方言では、その末核型から他の型への変化がいろいろ見られる。それを秋永一枝編（2014）の巻末「東京アクセントの習得法則0」から3～6モーラ語の該当例を簡略化して示すと(2)のようになる。氏の「転向」とは、型の語彙的な所属替えの意味であろう。

(2) 東京方言における末核型からの変化（転向）

3M 語 無核型へ：「い・く・さ・豆・腐・林・東」等、頭核型（①型）へ：「会・議・信・濃・長・野」等。

4M 語 大部分は無核型か次末核型（－②型＝③型【次節の狭義のB型】）にも発音される。

5M 語 多くが－③型（＝④型）や無核型に転向し、現在も盛んに転向中。

6M 語 ○○○＋○○の複合語で後部が限られた語に見られ、－②型（＝⑤型）にも無核型にも発音されるものが大部分。

なお、金田一春彦（1942, 1943）も末核型が他の型にも発音されると述べ、秋永編（2014）の挙例をいち早く発表している。他にも先駆的な指摘が多く見られる（拙論 1978: 52 も参照）。

3.2 普通名詞におけるA型・B型問題

東京語アクセント研究の初期段階から、文部省国語調査室において、片や安藤正次・東条操、片や神保格・佐久間鼎という著名な研究者の間で、4 モーラ名詞の「雷、物差し、金持ち」等々の語彙に、片や〇〇〇〇] (④型)、片や〇〇〇]〇 (③型) という違いが一貫して認められた。それを承けて三宅武郎 (1943a) は④型をA型、③型をB型と命名し、それが一般化した¹。

より正確には、三宅は4 モーラ語のみならず5・6 モーラ語まで視野に入れており、かつ、末核型 (原文は「切尾型」) をA型としたのに対し、非末核型 (「非切尾型」) をB型と呼んでいる (本稿の下線は上野)。B型を「A型以外」とし、「研究所」などの無核型も含めて広く捉えている点が注意を引く。つまり、B型は狭義の「4 モーラ語でかつ③型」だけとは限らないのである。

三宅は、A型が東京アクセントとして本来的、伝承的、かつ原則的で合法則的のもの、B型 (特に4 モーラ語の) は一種の変種、異質的、かつ時代的には新しいものという意味で、A、Bの順に命名したという。他にも、有核動詞からの派生名詞はハナ]ス→ハナシ] (話) のように末核型になることから、タノシ]ムからの派生形はタノシミ] のA型が本来型と考えられること、スズリ] (硯) は スミスリ] (墨摺り) に由来すること等もその裏付けとしている。

このA型・B型はどちらも話者相互に東京語として違和感がないことから、両型ともに東京語、すなわち標準語のアクセントとして認められた。これに関連して、私はかつてA型話者の川上蓁氏にB型の発音を聞くとどんな印象を持つのかと直接伺ったことがあるが、その答えは「自分とは違うと思うものの、違和感はない」というもので、先人の感覚と同じ反応であった。

次いで満田新一郎 (1951) は、1947年に都区内50小学校で(3)の4モーラ10語を調査した。

(3) 雷、足並み、缶詰、年寄り、足音、食べ物、楽しみ、居眠り、気の毒、わがまま

その結果、A型率は都心が低くて周辺が高いこと、同一人、同一語彙ですらAB両型は変動してやまないものであること等が分かったとして、A型・B型が一貫して区別されるとする三宅説を否定し、「B型は次第にA型の領域を侵しつつある。而して抵抗力の少い人、所及び語彙より、それは行われている。従って、都心より周辺へ、更に地方へとB【Aとあるも、私見で訂正】型は進出する。それらの結果、この絶間なき混乱のため人々はA型B型に対してのはっきりした態度を失おうとしている。」 (p. 189) と結ぶ。

なお、岡山 (氏の出身地の岡山「市」であろう) でも調査をし、全体に岡山の方がA型の率が高らかに高いものの、「居眠り」と「わがまま」が低いなど語彙による違いは共通していて (それでも、それぞれ東京の24.0%, 38.8%に対して岡山は63.3%, 88.8%), 「B型が、地方においてもA型の間に進入しつつあると見てよく、恐らくは、この現象は岡山のみに止まるまい」と述べている。

¹ A型・B型の用語は、これより早く三宅 (1939) ですでに使われている。しかし、その説明は本文に後述する歴史的順序を踏まえたものではなく、自分と違う型に対する話者の受け止め方にも三宅 (1943ab) の記述とは異なる点がある。何よりも、後続の満田 (1951)、清水 (1971) が三宅 (1943a) のみに言及して論を展開していることから、三宅説の後者が一般化したものと判断した。

ここで三宅 (1939) の内容について補っておくと、「カミナリサマ (雷様)」などの6モーラ語や「シンイチ (信一)」などの人名にもA型とB型があることに触れ、一方で「一月、十二月」等はすべてA型のみでB型に言う人はないとも述べている。また、A型のハザクラ] (葉桜) の人は、前部要素が有核の「夜桜」はヨザ]クラと言い分けるのに対して、B型のハザ]クラの【これもBに留意】人はヨザ]クラと同じ型に言うとして他の例も挙げている。なお、本文後出の「切尾型 (せつびけい)」には、ここでは「しりきれ」のルビが振られている (「型」の読みは不明)。

さらに清水郁子(1971)は、1957～1960年に(4)の22語他(「25語」とあるも他の3語は不明。元の配列順のままで、*印は満田と共通)を選んで3世代に渡る分布調査をした。老年層の大部分の語彙にはっきりした分布が現れており、新しいアクセントのB型は隅田川流域付近(山の手線と隅田川に挟まれた地域)に分布し、古いA型はそれを除く旧市内及び周辺にあることを明らかにした。そして、そこからの歴史的推定として、「古い東京にはA型があった。そこへB型が当時の東京の中心であった下町方面におこり、次第に交通網によって東京全域にひろがり、今や少年層は圧倒的にB型になっている²。」(p. 58)と述べる。なお、その直後に「(一部分には平板型や他の型への変化もないことはないが、他日の問題としたい。)」と付け加えている。

(4) 楽しみ*, 縄跳び, 金持ち, 剃刀, 鋸, 金槌, 物差し, 足音*, 足跡, 居眠り*, 雷*, 物置, 酒杯, 灯し火, 駒下駄, 食べ物*, 大風, 大水, どんぐり, 気の毒*, 年寄り*, なぎなた

他の関連研究のうちA型B型問題を展開させた説を見ておくと、相澤正夫(1984)は、その表題通り、A型からB型への変化を「尾高型から非尾高型への移行」と捉えるべきとした。三樹陽介(2014)は、相澤と同じ主張に立って「首都圏方言」内の神奈川・山梨両県を調査し、(引用文はないが)三宅(1943b)では既にその主張を想定して論が立てられているとする(p. 112)。

ここで改めて三宅(1943b)に戻ると、次のようにある(現代語表記に変更)。「AB両型は共に東京アクセントである。それが現在の壮年層では純然たる対立を示しているが、青年層以下ではABの混合型(言わばAB型)ともいふべきものが発生している。即ちAB両型を家庭の内外で早くから耳にしつつ成長して来たところから、ある語についてはA型に、又、ある語についてはB型にという風に、混合して発音することがあるのである。それと同時に一方ではAB両型の双方から第三の下中型(即ち平板式)に歩み寄ろうとしている傾向もあらわれている。【中略】将来は、或は混合型(その中には第三型の平板式化的傾向をも含むもの)に落ちつくようなことがあるのではないかということをも考えておかなければならない。」(pp. 77-78)

この話題のまとめとして、自らの前掲旧説を改訂した相澤正夫(1996: 693)から引用しておく。「今回の分析によって、変化の流れは、むしろ「尾高型を含む起伏式から平板式への移行」と見るのが妥当であるとの確信を得た。」すなわち、有核型から無核型への流れと見る説である。

4. 岩手県雫石方言における普通名詞の末核型

岩手県岩手郡雫石町は、盛岡市の西隣に位置し、秋田県と接している。私は1946年生まれで中学まで地元、高校は盛岡市に通学。大学は東京。両親祖父母とも町内出身。アクセント体系は $Pn=n+1$ で、アクセント核は昇り核/[$\uparrow$]である。末核型は核位置の問題で、核の性質は問わない。

² この後さらに、分布図と東京の歴史を組み合わせ、次の推定をしている。ただし、その最後を「と見てはいけなだろうか。」で結んであり、敢えて脚注に回して、以下に要約的にまとめる。「東京旧市内15区はある時代には周辺地区と同じく殆んど全部がA型であっただろう。そこに家康が入府して江戸の整備をし、今の日本橋から銀座、新橋等の商店街である下町を作った。そして日本橋は江戸の中心となり、元禄へかけて関西の物資導入とともに西の方の商人が続々と住みついた。平山輝男編『全国アクセント辞典』によると、この調査語の京都アクセントは大部分3拍目に「さがりめ」があり、古いA型に新興商人の関西的な刺戟が加わり、この商店街にB型が生じたのではないか。」

なお、平山辞書でH3型は「金持ち, 剃刀, 金槌, 足音, 足跡, 雷, 物置, 酒杯, 灯し火, 気の毒, 年寄り, なぎなた; (3)足並み」, L3型は「縄跳び, 鋸, 物差し, 居眠り, どんぐり」で、残る「食べ物, 大風, 大水」はH2型, 「駒下駄, (3)缶詰, わがまま」はL0とある。「楽しみ」はH0と推定される。後出(5)での③型該当語は、H3型「網打ち, 腕ずく, 胸倉」, L3型「針刺し」だけである。

私の方言における普通名詞のアクセントは、本稿では 3 節で言及のあった項目に事実上限定して述べるが、まず、3.1 節の秋永編 (2014) から引いた(2)に、東京で末核型から無核型ないし頭核型へ転向とある「いくさ・豆腐・林・東；会議」は末核型である（「信濃・長野」は②型）。

続く満田 (1954) の(3)の中では、「足音、居眠り」の 2 語のみが③型（「居眠り」のように後部が 3 モーラの複合語は－②型が原則）で、残り 8 語はすべて末核型である。

清水 (1971) の(4)は、(既述の * を除き) 次のようになる。「どんぐり①、縄跳び②③、足跡③³」；「金持ち、金槌、酒杯、＜稀＞駒下駄」の 4 語は前部要素が無核ゆえの①（後述）、「なぎなた①」は後で覚えた単語だが、末核型も変ではない。そして、残る 7 語はすべて末核型である。

ここで注 1 の三宅 (1939) の例に触れておくと、「雷様」はカミナリサンかゴロゴロサンが普通で、ンには核が来ないので⑤型であり、-サマとしても末核型にはならない。人名「信一」は末核型である。「一月」等、月名はすべて次末核であるが、「(お)正月」は末核型。「葉桜」は前部が無核ゆえ無核型、前部が有核の「夜桜」は、後部が 3 モーラで「○狭広」（「狭」は狭母音の i/u, 「広」は広母音の e/o/a）の構造ゆえ、弱い「狭」は核を担えず、－③型のヨ[ザクラとなる。

最後に、1911~1962 年生の東京出身者 19 名に約 12,800 語を調査した柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編『東京語アクセント資料 上・下』（1985）を分析した相澤 (1996: 692) が、すでに一人も末核型を保持していなかったと認定した 41 語を(5)に示す。中でも、下線（原文）の 21 語は全員無核型である。(5)に対する私のアクセントも、丸付き数字で(5)の中に併せて記す。

- (5) 合い札④、網打ち(相撲)④、家柄④、家元④、生け捕り①、腕ずく④、海鳴り④、大幅④、奥書④、片言④、北風④、雲行き④、尻馬(に乗る)④、税込み④、瀬戸際④、近づき(になる)④、賃借り④、突き傷①、月極め④、梅雨明け④、中庭④、生首③、習わし④、西風④、早鐘③、腹癒せ④、針刺し④、紐付き①、平仮名①、札付き①、臍繰り①、鋒[矛先]④、幕内(相撲)④、まやかし④、水餅①、胸倉①、胸先①、胸元①、元締め④、雪折れ①、脇差④

これらの中の雫石方言の無核型は、(4)の場合と同様に、前部要素が無核だとその複合語も無核になる規則⁴か、複合動詞に由来する名詞は無核型になる規則ゆえの正規の型であるので、末核型が無核型に変化した東京方言の例とは全く異なる。従って、(5)の 41 語中で例外は「生首、早鐘」の③型 2 例だけで、残る有核型はすべて末核型となる。このことは、雫石方言が末核型をはるかに多く保存していることを示している。とりわけ、「網打ち、海鳴り」などの有核名詞＋動詞派生 2 モーラ名詞のものは末核型の安定度が高い。

5. 雫石方言における名字の末核型

ここでも、先に東京方言の名字のアクセントを一通り見ておく。

³ 親世代まで「どんぐり」は su[~dami]（～は前鼻音）、「縄跳び」は nawaha[ne, nawappa[ne（縄跳ね）という方言形があったので、借用語に違いない。「足跡」は(3)の「足音」、さらには「足首、足型（asukada）」なども③型である。ただし、「足掛け、足かせ、足切り、足癖、足先、足摺り、足留め、足取り、足並み、足早、足元、足技」は末核型。なお、清水によれば、「足跡」が東京の中でも早く③になっているという。また、満田によれば、(3)の中で「居眠り」が最も③型の率が高いとある。

⁴ 実は「北、西」も無核型である。それゆえ、「北風、西風」も無核型が期待されるところであり、祖母は実際そう発音していたが、私は末核型に変わっている。「東、南」は末核型で「東風、南風」も末核型なので、それに群化して「○風」がすべて末核化したものと見る。「突き傷」はあまり使わず、前部が有核動詞の「刺し傷、擦り傷」に合わせて③型に言いたくなるが、意味をよく考えると、「突く」の無核型に合わせた無核型となる。

5.1 東京方言における名字のアクセント

秋永編（2014）は「アクセント習得法則 20」で固有名詞一般に「普通名詞の型にくらべ、型の種類が少ない。例えば、末核型、次末核型が少ないなど。」とした上で「22 姓」を述べているが、ここは「癒合語、結合語」などの定義は気にせずに、(6)の実例を見る方が分かりやすい。

(6) 東京方言の名字のアクセントの実例（癒合語は後部要素で例示）

癒合語の 2M 語：「田，野，賀，我」は多く①型（小田；小野；古賀；曾我 等）；

同じく「井，木」は①型（由井；三木 等）。

同 3M 語：「井，木，田(ダ)；沢，島」は①型多し（浅井，青木，池田；小沢，小島 等）；

同じく「田(タ)，野；川，口，山」等は①型多し（柴田，永野；田川，野口，小山 等）。

同 4M 語：「上(カミ)，川(カワ)，島，本，山」等は①型多し（川上，北川，大島，松本，石山 等）；

同じく「内，川(カワ)，口，原」等は③型多し（竹内，古川，山口，上原 等）。

結合語は複合語法則で③型：アクタ]ガワ，ワカバ]ヤシ。接合語も③型：ヤマノ]ウチ。

転成語は，「池，岡，島，杉，滝，星」等や「東(ひがし)，南，柳」等で多くが①型。

5.2 東京方言との比較から見た雫石方言の名字のアクセント

前出(6)に対する雫石のアクセントを(7)に示す。但し，アクセント型別にまとめ直してある。

(7) 東京方言に対する雫石方言の名字のアクセント

東京方言で無核型の例は，雫石方言ではすべて末核型になる。

雫石

2 モーラ語：「小田，千田，小野，日野，古賀，曾我」等

○[○

3 モーラ語：「浅井，青木，池田，小沢，小島」等

○○[○

4 モーラ語：「川上，北川，大島，松本，石山」等

○○○[○

2 モーラ①型は，原則としてそのまま対応。

「田井，由井，乃木，三木；池，岡，島，杉，滝，星」等

[○○

他の有核型は，原則として 1 モーラ分後ろに核がずれて②型になる。

「柴田，永野，田川，野口，小山；東，南，柳」等

○[○○

「竹内，古川，山口，上原；芥川，若林，山之内」等

○○[○○；○○○[○○

語例の追加として，以前，拙論（2020: 57）で外来語の末核型との関連で取り上げた人名の末核型を(8)に示しておく。ただし，(7)と後部文字（の読み）の重複を避けるため，一部の例を入れ換えて示す。ここは型別に掲げてある。

(8) 雫石方言の末核型人名の追加例

②型：安部，井出，木戸，久保，久米，諏訪，曾根，伊達，千葉，柘植，野間，馬場，宮，...

③型：足立，渥美，入江，木村，小池，相馬，中根，中野，林，別所，三浦，八幡，鷺尾，...

④型：青柳，池上，石黒，石原，井上，黒沢，小林，長沼，中村，藤岡，山中，源，渡辺，...

ただし，(7)で原則的に 1 モーラ後ろに核がずれるとした点には，語音条件が関与する。移動先が核を担う音声的強さを持つ「強」であることが必要で，そこが「弱」だと移動は生じない。

- (9) 3M 語①型：大矢，菅野（かんの），平（たいら），…；有田，荻野，桂，田村，成田，…
 4M 語②型：杉村，福島，山下，…
 4M 語①型：遠藤，及川，大石，…；落合，楠(木)（くすのき），橘（立花），古館，…

つまり、核の次が長音，撥音，二重母音のイという弱い特殊拍であるか，母音が「狭」（i/u）でさらにその次が「広」（e/o/a）の場合は移動が生じないのである。これらの場合，核の次が音声的に「弱」であるためにそこにずれることができず，元の位置に残っていると解される。（東京方言とは対応しないが，「浅沼，石塚，上村」なども同じ条件下で②型である。）それに対して，(7)の例や「秋山，桜井」などでは，第3モーラが「強」のためにそこに核が移って③型となる。「竹内，山口」などは第3モーラが「狭」であるが，第4モーラも「狭」なので，第3モーラは相対的に「強」として扱われて③型となる。これは3モーラ語の「清水」などでも同様で，「○狭狭」ゆえに②型となる。核の移動は(8)の②型「宮」などでも起こっている。また，4M語①型の「楠，橘，古館」などは，「○狭広○」の環境で東京よりも古い型を保持している例である。

ただし，「赤坂，岩崎」などの②型と，「金沢，川口」などを③型は，それを分ける条件が見つからず，個別に決まっている。そのために，これらの環境にある名字の場合，特に地元になくて東京で知ったものの場合，そのアクセントに迷いが生じてしまうことがあり，これが揺れ・併用の元となる。

5.3 全国名字ランキングから見た雫石方言の名字のアクセント

「名字の由来 net」 <https://myoji-yurai.net/prefectureRanking.htm>（2024年7月時点）を利用して上位2000位までを調べてみた。これはあくまでも「漢字」で分類し，旧漢字と新漢字も別の名字扱いをして，それぞれの名字に通常は多数の読み方が付されている。アクセント記載はない。

例えば，私の名字表記「上野」を見ると，「【読み】うえの，うわの⁵，かみの，あがの，こうずけ，こうの，あげの，かみもろ [全国順位]87位 [全国人数]およそ196,000人」とある。これらの読みをすべて取り上げるとキリがなく，実例を知らない名字が多くなる。そこで，原則として最初の読みを取り上げて私のアクセントを記入（他は必要に応じて注記）したところ，結果は(10)となった。語数は併用も含む。本来の併用の他に，東京で知った名字や馴染みのない名字で迷い，揺れるものも含むが，大勢に影響はないものと見る。

(10)2000 語リストにおける雫石方言の名字のアクセント

M\核	－①型	－②型	－③型	－④型	－⑤型	⑦型	合計
2M 語	2 型 94 語	1 型 83 語				0 語	177 語
3M 語	3 型 332 語	2 型 386 語	1 型 155 語			0 語	873 語
4M 語	4 型 343 語	3 型 317 語	2 型 292 語	1 型 66 語		0 語	1018 語
5M 語	5 型 1 語	4 型 39 語	3 型 7 語	2 型 1 語	1 型 0 語	0 語	48 語
合計	770 語	825 語	454 語	67 語	0 語	0 語	2116 語

⁵「上野（うわの）」姓は，私の知る限り，岩手・青森の南部藩と，北陸の石川・富山にある。一方，同じ地名は，雫石を含む東北から福井県・三重県までであるが，それより西には見当たらない。雫石では名字も地名も③型で言う。東京では私を知っている人からはウ]ワノと呼ばれる。なお，「上野（うえの）」は，東京では名字は①，地名は⑦であるが，私の方言で言えば，名字は②型，地名は③型。

東京方言のアクセントに記載がないので完全な比較はできないが、秋永一枝編（2014）の記述などと比べて(10)で目につくのは、4 モーラ語までは末核型が非常に多いことである⁶。確かに、総数では次末核型（－②型）が最も多いが、5 モーラ語では末核型が激減すること（1 語対 39 語）と、3 モーラ語でも次末核型よりやや少ないことによる。それでも 3 モーラ語では 332 語対 386 語である。なお、5 モーラ語の末核型の例は「小笠原」である（これは地名でも⑤型）。秋永習得法則 22 には、（（古））としてコーノイケ]（鴻池，今はコーノ]イケ）が出ているが、雫石にはなく、東京で知った名字で③型で言うものの、末核型で発音しても変ではない気がする。

今一つ注目すべきは、(6)で東京方言に目立った無核型が雫石方言では皆無である点である。

要するに、雫石方言の地名語彙は末核型が健在で、無核型への動きは見られないことになる。

6. 結論

末核型が有標の方言として、まず関西方言と東京方言を見た。東京方言の A 型 B 型との対比で見た雫石方言は、東京で末核型から変化している語彙リストでも末核型が多く残っている。名字における末核型も、東京には事実上ないのに対して雫石には豊富にある。そして、東京に多い無核型は雫石には皆無である。そこから、雫石方言の末核型は有標ではないと結論づけられる。

【引用文献】

- 相澤正夫（1984）「東京方言アクセントにおける尾高型から非尾高型への移行—いわゆる A 型 B 型のゆれをどう捉えるか—」『日本方言研究会第 38 回研究発表会 発表原稿集』：1-9.
- 相澤正夫（1996）「尾高型アクセントの現在位置—『東京語アクセント資料』の分析—」『言語学林 1995-1996』，三省堂：683-695.
- 秋永一枝（2002）「東京語の発音とゆれ」『現代日本語講座 3』明治書院：40-58.
- 秋永一枝編（2014）金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典 第 2 版 CD 付き』，三省堂.
- 上野善道（1978）「アクセントの個人差をめぐる研究概観」『言語生活』320：48-59.
- 上野善道（2020）「北奥方言の外来語のアクセント資料」『国立国語研究所論集』19：47-88.
- 金田一春彦（1942, 1943）「移りゆく東京アクセント」(1)~(4)『国語文化』2(13), 3(3・4・6). (『金田一春彦著作集』第 9 巻，2005，玉川大学出版部：39-76 に所収)
- 清水郁子（1971）「東京語のある四拍名詞のアクセントの推移について—いわゆる A，B 型を中心として—」『日本方言研究会第 12 回研究発表会 発表原稿集 第 12 号』：1-64.
- 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』，勉誠出版.
- 服部四郎（1931）「国語諸方言アクセントの概観」，『方言』1(1)：11-33.
- 三樹陽介（2014）『首都圏方言アクセントの基礎的研究』，おうふう.
- 満田新一郎（1951）「いわゆる A 型 B 型アクセントはどうなつたか」寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸編『国語アクセント論叢』，法政大學出版局：179-189.
- 三宅武郎（1939）「放送アクセントの一問題」『放送』（日本放送協會）9(12)：19-22.
- 三宅武郎（1943a）「標準アクセントの一問題」『国語文化』3(12)：10-17.
- 三宅武郎（1943b）『國民學校アクセント解説 第一學年用』，國語文化研究所.
- 和田 實（1942）「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音聲學協會會報』71：10-13.

【付記】本稿は，2024 年 8 月 3 日に北海道大学音声学・音韻論ワークショップで「末核型が有標ではない方言：名字と地名から見る岩手県雫石方言」と題して発表をした中から，地名を除いた部分をまとめたものである。なお，地名でも末核型が普通であることは，近刊拙論「岩手県田野畑

⁶ 参考までに，中井幸比古（2002: 234-244）を見る限り，京都方言の姓に末核型は見当たらない。

村方言の地名のアクセント―末核型に焦点を当てて―」（『国語研究』88）の中で併せて論じた。

本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（プロジェクトリーダー：五十嵐陽介）、並びに「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）の研究成果も兼ねる。